

1985年1月15日発行 毎月1回15日発行 1974年1月8日第3種郵便物認可

前衛 No.297



前衛 2月号 No.297

おれ

「新風管法」って知って
る。▼「前国会で改正され
てきた新しい風俗管法
のこと。」こう答えたあなた
あなたは相当その方面の情
報通ですぞ▼というほどの
ことでもないか。ようする
に「フアッション・マッサー
ジ」や「カラオケ公書」
を取締るといふ名目で登場
したアシである▼いちばん
の変化は、警察官の立入り
が認められるようになったこ
うになったこと。「戦前の臨
検の復活ではないか」という
声もあつたが「これが認めら
れなければ改正の意味がな
い」との警視庁の横断で、
「リヤリヤ」切られてしまつた
▼これとはべつに、先月「
コンピュータ犯罪の防止」の
ための警察庁主催の研究会が
開かれた。その中でも「警察
官の立入り」の明文化措置が
強調された▼周知のとく戦
前の日本では、内務省―警
察の権力は絶大であつた。
地方自治はほとんど認めら
れていず、内務官僚が地方
行政と警察を一手に握つて
いた。警察出身者が官選知
事になったりそのぎやぐが
起こつたりもする。簡単にい
えば同一省庁内での人事に
すぎなかつたわけだ。天皇
制国家の強さの秘密の一つ
に、行政と司法の一体化に
より生活のすみずみまで入
り込み支配する内務省の存
在があつたといわれている。
「警察国家」といわれるゆ
えに最近では、車内暴力追
放キャンペーンのフアン臭
がはつきりする▼そもそも
問題のとりあげられ方が不
自然だ。新聞やテレビがい
つせいに「老人が地下鉄
内で若者の無法な暴力の犠
牲になった」と騒ぎだして
も変である。心だんなら
「記事にもないくせに」▼
警視庁記者クラブで発表さ
れ、おまけに「大々的に取
上げる」という報道の仕方
になる。明らかに権力の作
為が背後にあるわけだ▼こ
ころがキャンペーンの最
中に話がこじれてきた。被
害者なり他の乗客の「カウ
ンター暴力」をどうみるか
が問題になったのである▼
暴力を行使する権利を独占
したい警察は、正当防衛の
範囲を厳しく制限するとい
う対応をとつた。一般市民
の役割を通報という行為に
限定しようとするのである。
しかもその通報を倫理的に
義務付けようとする世論操
作が併行されている。全
国民を権力の「目玉」に組
織しようというわけだ▼
いすれにしろ、警察のこれ
にかける執念はすさまじく、
またきわめて周到である。
管制塔占拠を成田戒厳区
画の口実としたように、
「森永事件」での失態を職
質強化の理由にしたように、
自分の失敗をも権限強化
の手段にしてしまつた。

誌面紹介

ブラック・ホール……………	2
小山弘健先生の死を悼む……………	3
肥大化する生協運動に内在する危機……………	4
安全性と公共性を切り捨て 国鉄の人減らしはつき進む……………	6
今、郵政の職場は……………	9
《映評》 客観的に観ることのできない三作品……………	10
哲学問答Ⅱ 第三回 人生「拾い読み」の精神で……………	11
ふわっと交流会について……………	12
「普通」の人達へ 第一回 「ねえ、聞いて聞いて……………	13
「新生」前衛を読んで……………	14

表紙 空間工房

小山弘健先生の死を悼む



小山弘健先生が亡く
なつた。一九九二年か
ら数えて七二年の生涯
であつた。昨年末にい

(一)

ただいた新著「たたかう住民たち」(新泉社)への礼状で、近いうちにぜひお目にかかりたい旨をお願いしたばかりであつた。昨秋以来御病状が進んでいたとのこと、なお壮大な著述活動の途上で無念の病死であつた。心から哀悼の意を表したい。

小山先生に私達がおつきあひいただいたのは、六〇年代末以降のこと、先生の七二年の御生涯の中では比較的最近のことであつた。もちろんそれ以前にも先生の膨大な著作の数々に接していたし、私個人についていえば、一九五七年頃、先生の精気あふれるお話を京都でうかがつたことがある。

(二)

小山先生への追悼は、先生の生涯をかけた解放運動への情熱と、その発展を期しての理論活動を、先生がマルクス理論学に対して行った科学的批判の方法をもつて継承すること、そのために先生の志をついで、その理論活動の足跡をマルクス主義理論史の中に正しく、しっかりと位置づけていくことにあるだろう。とはいへその作業は容易なものではない。

先の「途上にて」の巻末に付された「著書・編著目録(一九三八年―一九七九年)によってみても、その著作は六八冊にのぼつている。著作に加えられる新しい新聞・雑誌論文は、未整理のままだ。

数が多いだけでなく、その研究分野もまた広い。年代にそつて分類してみると

①軍事論の分野
マルクス主義の方法になつてのわが国はじめての本格的軍事論として有名な「近代兵学」(一九三八年 三笠書房)をはじめ、「近代軍事技術史」(一九四一年 三笠書房)「近代日本軍事史概説」(一九四三年 伊藤書房)などがある。すべて二〇歳台の作品であり、その多くが七〇年代に復刊されている。

②戦略論の分野
戦後危機の下での革命運動の高揚を背景にした、日本共産党の革命戦略をめぐつての著作。「日本 民主革命論争史」「日本資本主義論争史」(以上一九四七年 伊藤書店)から「日本資本主義論争史」(一九五三年 青木書店)に至るもので、日本共産党の革命的左派

に位置し、精力的に論争にコミットした時期の著作である。五〇年分裂に際しては神山派の立場から論争をより党より除名されている。この間の理論的蓄積は、軍事的・封建的帝国主義(レーニン)としての「日本帝国主义」(全三巻・浅田光輝との共著 一九五八年 青木書店)に集約された。

③運動史の分野
「日本マルクス主義史」(一九五六年 青木書店)から、日本共産党のスターリン主義的性格を暴露する「戦後日本共産党史」(一九五八年 三月書房)を経て、今日までいたる日本マルクス主義史の研究。

この間「講座・現代反対制運動史」(全三巻 一九六〇年 青木書店)、「日本社会党史」(一九六五年 芳賀書店)等の著作を生む。

運動史の分野から派生した著作として、「片山潜」(全三巻 一九五九・六〇年 未来社)、「日本の非共産党マルクス主義者」(一九六二年 三一書房)等、評伝の分野にも、独自の境地をきりひらいた。

④新左翼運動の構築にむけて
「戦間的左翼とは何か」(一九六九年 芳賀書店)「戦間的労働運動の論理」(一九七〇年 六月 芳賀書店)「反体制運動の変革」(一九七一年 現代史研究所)などを通じ、新左翼運動に期待、「戦間的統一戦論」(一九七八年 主体と変革社)で、分裂する新左翼戦線に、「統一」の必要を説く。

⑤年表・文献解題
「日本労働運動・社会運動研究史」(一九五六年 三月書房)から「日本社会運動史研究史論」(正・続 一九七六年・七九年 新泉社)にいたる先生ならではの研究分野

(三)

これらの著作を通じ、先生は、日本の革新的左派・講座派のもつとも良質な部分の流れを継承、しかも革命運動・社会運動が提起する新しい課題に「生々」と反応し、また立場を異にする新しい活動家・理論家にも広い心をもつて接してきた。

現在の「社会主義」が混迷を深め、そして米ソ体制のもとで進む核兵器競争、生産力主義への拝跪が生む環境破壊など、いま人類をとりまく情勢はたいへんきびしい。こうしたなかでこそ、危機を科学的に分析し、その克服をなす力をもつものと期待されたマルクス主義もまた危機に陥つている。その意味では先生の「理論」そのものも、また大きな試験をうけていた。そうした状況を十分にふまえていたればこそ、先生は衰へることのない情熱をバネに、問題意識あふれる研究プランをもつて現実に打ちむかつた。

小山弘健先生は、すばらしい記憶力を武器に、無限に広がる複雑な理論戦略に対し、あざやかな交差整理を行いつづけた。しかもその作業を通じ、多くの大作を生みだした。

今日ほど、ありあまるほどの理論の洪水に対し、科学的検討を通じ、新たな理論創造を行なうことが問われているときはない。小山先生の死がもたらした穴の大きさを、ますます感じざるばかりである。だが私達は、先生を失つた悲しみをうけて、その仕事をしっかりと引きつぎ、先へと歩まなければならぬ。

肥大化する生協運動に 内蔵する危機

—進行する資本の巻き返し— 不破雷童

一、すすむ集中・統合

いま日本の生活協同組合運動は、「時代の流れ」のなかで大きく変貌を遂げようとしている。いやむしろ、そうした「時代の流れ」を形成する一翼を、積極的にになおとする動きが顕著である。

日本における生協運動の中枢、日本生活協同組合連合会(日生協)は、現在第三次全国中期計画なるものを打ちだしている。

第一次・第二次の中期計画の過程で、県内地域連帯をつたい、そのための「連帯の核になる拠点生協」づくりをすすめてきた。その根底には、「一県に一生協があればいい」という発想があった。そして、つぎつぎと大型組織合同合併が進行し、数万、数十万人単位の組合員を擁する巨大生協が誕生していったのである。おかげで、競争的存在にある地域の中小生協は、熾烈をきわめる組織攻防戦を強いられることとなった。

「第三次中計」は、こうした県単位ですすめられてきた「地域連帯」統合を、さらに県を越えた「ブロック連帯」統合へと押し上げていく構想をもつ。全国をブロックわりし、そのもとで「物流センター」「づくり商品」とおした「共同事業」の名のものを統合をすすめるようとしているのだ。いわば、COI

OP商品や「人質」にとったかたちで統合が無理強いされているといつてもいい。そして同時に、こうした力を背景に、生協空白県への進出を強化している。大量の組織活動支援部隊を海を越えて四国に送りこむなど、山口組も真つ青、という全国制覇にむけた道を突き進んでいる。

「県内の三〇%を組織化する」「小売シェアの五%を獲得する」等のいきみは、なかで、地元商工会などの「生協規制強化」をせまる動きに抗して、組合員数が一千万人にせまる組織化を、今年実現しようとしているのだ。このような生協の肥大化という現状は、はたして何を獲得し、または失いつつあるのだろうか。

二、協同購入理 念の喪失

地域生協運動は、高度経済成長の破綻、オイル・ショックを機に一大飛躍を遂げた。

高度成長の見返りともいえる公害・食品安全問題などが噴出し、地域住民運動、消費者運動が高揚するなかで、それをうけて地域における生協づくりが急速にすすんでいった。工業の偏重による農業破壊は、食糧自給率の大巾な低下(穀物にいたっては、現在、自給率三三%)をもたらし、生産至上主義は、農業・化学肥料の大量投与につながった。さらに、広域市場流通にみあうかたちで食品

添加物を増大させ(鮮食糧品を遠方にはこぶためには、合成保存料の添加などが不可避となる)、「食」と「農」のいちじるしい工業化の道をひた走ったのである。地域生協は、こうした大規模市場流通機構の対抗者として「共同購入」の理念をもって活性化していった。産地直結方式や消費者組合員の参加による安全・良質な商品の開発を前提に、既存の流通機構とは異なる共同仕入れをおこない、地域における班づくり、班を基礎単位にした注文・供給という共同の場の形成をもって、共同購入方式に意味を与えてきたのである。

しかしここ数年、大型化した生協は、こうした理念とはかけ離れたシステムをとりはじめている。店舗生協はその典型だ。大手スーパー並に、低価格、多アイテム(いわゆる豊富な品ぞろえ)、大量販売で勝負しようというのだ。当然、安全とか環境保全は二の次になる。おなじやり方は、共同購入の分野にももちこまれる。合成洗剤(複合せっけん)と称しているが、有添加物の採用による「多規格・多アイテム化」。また、巨大化するために効率化がなによりも優先される。多くの消費者団体の反対の声をよそに、悪名高いロング・ライフ牛乳(超高温殺菌により常温下で三カ月放置しても腐らないという牛乳)をとり入れ、配送の合理化がすすめられている。さらに、OCR(コンピュータの導入による個人別注文・自動読み取り化)の採用、集金へのPOS(銀行個人口座引き落とし)システム導入をすすめている。班の事実上の解体。

「簡単・便利」を看板にする大型生協の姿は、共同購入の理念そのものをみずから否定するものにはかならない。自身がすでに大規模広域流通であり、共同の場をふたたび個人に分解することになる。高度成長のうたい文句の一つであった「簡単・便利」を復活させたのである。

しかし、こうした批判とほらはらに、大型生協が急速に拡大し、班員数(まがりなりにも班組織はある)個人組合員の寄せ集めとして一人あたりの利用結果も増大していることも事実である。それならば、こうした方式がいまの生活様式、「価値観の多様化」に対応したものといえるのだろうか?

三、分断・画一 化と機構への の従属

長期化した「スタグフレーション」は、十数年とはずいぶん違った状況を生みだしている。

なによりも、賃金抑制策の持続のまに、パートなどによる「主婦」の労働力化が急増している。そのため、地域に昼間「生活者」がいないという状態が進行している。そうなる、在宅主婦だけで生協の班(五名以上)を構成することは、かなり困難さを

ましている。

しかも、こうして「外に出た主婦」は、時間的制約などのため、家事の「手抜き」をせざるをえなくなりつつある。そしてそれに対応するように、レトルト食品が氾濫し多食産業が隆盛をきわめる。ファースト・フード・チェーンが花ざかりとなり、弁当屋に行列ができる。夕食サービスが日々の献立から材料まで提供してくれる。コンビニエンス・ストアが夜遅くまで店を開いていて、いつでも買物ができる。

数えあげればキリのないくらい、「自由選択」のはげがある。では、それを称して生活様式・価値観の多様化と、はたしていえるのだろうか。答えは、もちろん否である。

多様化しているのではなく、個々バラバラに分断されながら、巨大なシステムの末端にそれぞれくくりつけられ、よく見たらみんなおなじ内容の生活を押しつけられているのではないか。ちがひといえば、「ほっかほか亭」の弁当を食うか「ほかほか弁当」のそれを食うか、タイエーの添加食品を買うか「都民生協」のそれにするかくらいなものだ。

前号でもとりあげられた、九〇%を越える「中流意識」も、実態はプアーでありながら「意識」の上では画一化していることの反映ではないだろうか。

めいめいが個別化され細分化されながら、それぞれをとりこむ産業分野が確立していつている。食生活のみならず、教育、レジャーなどあらゆる面での産業化がすすみ、システム化されている。いうまでもなくこれは、資本のながる長期

化する不況に対応する産業再編に「成功」していることを意味する。オイル・ショックで一度ゆらいだかれらのヘゲモニーを、再度奪還しつつあるわけだ。同時に、そしてこれがいちばん重要なことだが、かれらはイデオロギー的な巻き返しにも成功している。「生活と環境をもう一度見直そう」という動きは後退させられ、「民間活力の導入」の名のもとに、企業の開発にたいする各種規制がゆるめられつつある。大衆の生活は、高度成長時代よりも「非人間化」しつつある。「簡単・便利」をかかげる「生協運動」は、こうした社会状況に迎合し、一層押しひろげようとするものにはかならない。生協の肥大化は、事実そうしたものとしてすすんでいる。「ほんらいの生協」の危機を促進しながら。

四、真に対抗的 な社会関係 の創出を

いま生協運動に問われているものは、いたずらに統合・合併し巨大化する道ではないと考える。むしろ反対に、より分化して生産者と消費者が直結する道をさぐるべきではなからうか。巨大流通機構の端と端におたがいが位置するようでは、あいての姿など見えてくはずがない。真に地域に根ざした生協運動として再生・再編される以外に道はないのだ。

弁当チェーンの横行。これは直接には、「主婦」が食事をつくるのをやめたことを意味する。かといって、亭主や子供が食事をつくるわけではない。家庭から「料理をする」という行為が消えてしまったのだ。事実、都内の家庭の三割にはマナ板も包丁もない、という調査結果もある。

そのほかにも、一人だけで食事をする子供がふえているという。つまり、団欒も家庭から消えかかっているということだ。料理という文化的・精神的行為が消え、家庭どうしの関係も希薄になる一方だ。「簡単・便利」ですませられる話ではないはずだ。大平内閣当時、「食糧安保」が叫ばれた。このことをもって、食や農のことを口にするのは支配階級の補完物だ、とする意見も一部にあった。でも食糧自給率は低下する一方である。なぜなら、政府や資本の意志では食糧の自給率の低下は阻止しえないからである。日本資本主義の不況乗り切り策の根本は、電機や自動車といった戦略産業の国際競争力を強化し、輸出をふやすことにある。それで得たドルで食糧、石油、原材料を輸入する。こうして日本資本主義の「再生産構造」を維持しようというのだ。

輸出がふえれば、経済摩擦が問題になる。アメリカの農産物輸入自由化の圧力が強まる。だから日本の農業は、最初から「日米経済摩擦解消」の「取り引き材料」にされているのである。「農業切り捨てが構造化されている」といってもいい。農産物輸入の自由化は、かならず食品添加物の規制緩和をもたす。それはそうである。農業と化学肥料の大量散布でつくられた

〔6〕アメリカの農産物を、海を越えてはるばる運んでくるのだ。保存料もたっぷり必要になるのはあたりまえである。

「簡単・便利、それに低価格」を売物にする「生協」は、食と農業の破壊に手を貸すものである。事実、日生協の主流派は、「食管制度」の維持に消極的である。暗にカリフォルニア米の輸入を望んでいるといっているはずではないだろう。

もちろん、だからといって「食管制度堅持」を叫ぶだけでもジリ貧である。よくいって、いびつな日本農業の現状を維持するくらいが関の山であろう。

安全性と公共性を切り捨てて 国鉄の人減らしはつき進む

野瀬 公彦（国鉄労働者）（聞き手と文責 本誌・海津隆志）

「駅業務の見直し」で安全対策などの 駅員が大幅に減少する

最初に、いま現在、当局との間で争点となっていることを聞かせて下さい。

いまもじつは団体交渉中ですが、東京南局

といっても実質的にはホーム作業、内勤とも営業係の仕事と一緒にやってきたわけですから。たとえば、現在ホームの要員は一列車当たり五人。内訳は、発車指示を出す助役（一人）、安全対策（三人）、放送（一人）となっています。これを、安全が一人、放送をゼロにして、一列車当り二人にしようということです。当局側はITV（テレビ受像装置）や自動放送機器の導入で対処できると説明しています。

しかし実際の影響は大きい。現在でさえ長いホームの中で駅員をさがすのに難しい状態なのに、今後は助役を含めても二人だけになってしまふ。不測の事故への対処がますます困難になることは目に見えています。

また安全対策要員は同時に案内業務もこなしている。当局は放送の自動化や案内掲示板

とで、たとえば手間とヒマのかかる有機農業を物心両面から支えることで、はじめて食糧自給率を自分たちの力で高めることもでき、安全な食品の供給もふやすこともできるだろう。食管制度をはずそうが、農産物を自由化しようが、ビクともしない体制がつくれるだろう。

このばあい、消費者と生産者をつなぐのは、価格の論理や手軽さではない。生活をとらえ直すという、きわめて意識的な要素である。

「食の文化」にしても同様だ。「主婦が家庭にもどる」だけではなにも解決しない。あるいは、働く女性が再度家事負担をひきうけるというのでもよくない。問われているのは男

どが争点になっています。

いまお話にあった運輸係といえますのは具体的にどんな仕事内容ですか。合理化でどのような影響が考えられるでしょう。

運輸係は昔、雑役手と呼ばれたもので、営業係と臨時労働者のいわば中間に位置づけられています。五五・一〇の合理化で清掃の仕

合理化。昨年六月に、当局は「余剰人員対策」と称する施策を提示し、早期退職・一時帰休・出向を三本柱とした人べらし攻撃をかけてきました。

実際にはどのくらいまで進んでいますか。

私の属している国労では協定の締結を拒否



70年代労働運動の「頂点」だった順法闘争(72年)

大型生協の論理、すなわち資本の論理に身をすり寄せれば、勝負は自から決まってしまう。規模の大きいほうが有利にちがいないからだ。もう一度、生協運動の原点に立ち帰り、消費者どうしの結合、消費者と生産者の結合を基軸にした運動展開が問われている。それを重層的につなぐ回路づくりが必要とされている。そのうえで自立した地域生協間の連帯がかちとられるなら、運動は社会的なネットワークづくりの環としての意味をもってくるだろう。

健康食品と名づけた商品は多いが



事が民託化されたので、雑務、その他が主要な仕事になるわけですが、「その他」の中に営業係に準じた乗客の扱いが入っていることとなります。東京南局の場合、四五〇名の運輸係職員のうち二一六名をカットすると提示されています。したがって東京駅などをはじめ運輸係全国廃止の駅が多くなる計算です。しかも、それら職員の新しい勤務先も現在なお示されていません。

影響はどうせん出てきます。雑務、その他

していますが、聞くところでは早期退職に応じた者が五〇〇人位だそうです。ただその条件も当初局側が流していたものほど甘い内容ではないらしい。またホテルなどへの出向にしても、三年後に果して現職へ復帰できるのかどうかはつきりしないので、雇用への不安はつる一方です。

また六〇・三を前に新幹線の車掌勤務に三六時間の長期拘束（現行二四時間）のものを導入しようとしていたり、こだま十二輛化にもなって車掌の定員を三名から二名に削減しようとしていたりしていますし、東海道線の駅にまで無人化を波及させようとしています。

極限状態なまでの人べらし——これが現在の合理化の特徴点です。

どうも金のかかるものは国鉄時代に最大限投資しておき、人間だけはバサバサ削った上で民営化というストーリー（国鉄とそこに働く労働者を喰いものにする「官営払い下げの現代版」がミエミエの感じがする話ですね。

高圧的になっています。

具体的にはいつごろから変わってきましたか。

分割・民営化への体制固めを はかる段階へ

合理化の進行が具体的な現場にまで影響を与えてきていることがよくわかりました。それで国鉄の合理化は全体としてどのような段階に達していると考えられますか。

〔7〕最初にぜひ言っておきたいのは、これだけ国鉄の「経営危機」が叫ばれておりながら、いままでも経営側が責任をとったことが一度もないことです。過去何回となく「再建案」なるものが打ち出されましたが、いつもその場のがれの対応に終始してきました。国鉄の赤

字は国鉄だからこそ赤字になるものが多いのです。その中には地方の公共輸送の確保といった本当に必要な赤字もあるし、借金による巨額な投資や「政治がらみ」など本来不必要なことからくるものもあります。

しかも赤字、赤字と言われながら、いまだに大幅な設備投資が続けられ、新幹線網やコンピュータ化などはあいかかわらず金がつぎ込まれているのです。反面、公共性を犠牲にしてローカル線や貨物輸送を大幅に削減してきたわけです。

そして現在、中心になっているのが人間の

総入れ替えて高圧的な 労務管理へ転換

ところで最近、職場の労資関係はどうなっていますか。

様変わりといってよいほど、管理者の態度が

〔 8 〕 八二年の七月頃からだと思えます。行革フ
 イーバーを背景に、管理局から現場長・各担
 当助役が派遣され、管理者の中心部を繰入れ
 替えて抑圧体制をつくり出しました。

前 八三年に入ると労務監査が行われ、これ
 までの労働慣行、職場での自治がいつせいに
 剥奪されるようになります。そして同じ年の
 十一月には国労東京分会の現職書記長が不
 当配転され、八四年三月には配転拒否を理由
 に解雇攻撃をかけられました。また、現場協
 議制(現場交渉権)の協約が一方的に破棄さ
 れたのは御存知のとおりです。

最近では「規律を正す」と称して、職員を
 起立させ呼名点呼をとり「五大接客用語(は



外注化阻止を闘う国労鹿児島島の自主管理
 (82年3月・南宮崎駅)

したいと思えます。
 とにかくいまかけられている合理化をあい
 まいにさせれば、つぎはすべてにつながっ
 ているわけですから、肝を決めてたたかっ
 てもいいです。

注1 東京南鉄道管理局は山手線では東京
 をはさんで神田から大崎まで、また
 東海道本線の熱海までと伊東線の伊
 東までを管轄している。

注2 駅の職制は駅長、助役(以上が管理
 職)のほか、運転係(運転主任、操
 車、信号)、営業係(出札、改札、乗
 客、運輸係(雑務、その他)となっ
 ている。

注3 もともと時短に関連して一昼夜交替
 制勤務を減らすものとして導入され
 た。C形の中には12時間拘束の長い
 勤務も入っている。ところが、それ
 を悪用して、日勤をC形に変える。出
 改札など一部ではすでに八三年に導
 入。攻撃がかけられている。もちろ
 んそれによって泊り要員を減らすた
 めだが、とくに遠距離通勤者にとっ
 ては大変な負担になる。

注4 運転主任は駅長業務を代行できるが
 人事権、業務指揮権をもたない一般
 職。これまでは勤続年数が長く、い
 ろいろな職域経験をもつ職員が登用
 されるが多かった。

い、です、ありがとうございます……」を唱
 和させるといったことまでやられてきていま
 す。業務命令ではないらしいので、私はパス
 させてもらっていますが。もちろん助役がメ
 モをとっています。
 また、ワッペン、ネームプレート、バッジ、
 言葉づかい、態度などの項目ごとに、助役が
 チェックすることもはじめています。とにかく
 管理者が口にする言葉が、効率化、規律、時
 代が変わった、〇〇判決はどうだ……など、ま
 るで判で押したように画一的で、いやらしい
 限りです。
 私が思うには、もし「規律」を語るのでは
 れば、まず国鉄の管理者がこの間の施策につ
 いて経営責任をとってからにしてくれ、と言
 いたい。

こうした合理化や抑圧型労務管
 理にたいし、組合や現場労働者の
 対応はどのようなものでしょう。
 組合にたいしては言いたいことはいっぱい
 ありますね。とにかく方針がない。後手後手
 に回っているからとくに最近組合員の掌握力
 が低下していると思えますね。「団交重視」と
 いうのも当局側は団交をひとつの通過点とし
 て、手続的なものとしてしかみていません。
 結局「対立」を確認して上にあげることまで
 してしまふ。といって非協力の指示とか職場
 でのたたかい方も出されないので、組合員の中
 中に「やる気があるのかな」という気持が強
 まり、その分だけお互い信頼し合えなくなっ
 ているのは確かでしょうね。もちろん、組合
 の指導部だけではなく、現場組合員の一人ひ

激しく闘われた反マル生闘争か
 ら、早いもので六年が過ぎた。
 現場組合員を狙い打ちにした4
 ・28処分、労働運動史上まれに見
 る大量処分は、全通中央のみなら
 ず、現場組合員を震撼させるに充
 分な処分でした。全通労働運動の
 根幹である職場闘争を「掃き
 現場組合員に、闘えば「首にする」
 という脅しであった。
 半年後には、「10・28確認」労
 使協調・郵政事業をともに守ると
 いう路線が成立し、現在より一層
 深化した形で、現場にあらわれて
 いる。

労使相方の永年の懸案であった
 「特別昇給制度」「実験時短」とい
 った大きな課題も、完全に定着し
 ている。
 省・当局はこういった背景の下
 で、小集団管理——企業意識の注
 入、第二臨調による攻撃によって
 労働者に我慢を強いている。
 これに対し組合中央は「制度政
 策闘争」という企業防衛路線を主
 軸にすえ、交渉一辺倒で対処して
 いるが、現実には何ら解決策は見

4.28処分内訳

3	58	286	1,464	3,663	5,009	8,183
解雇	職制	減給	告退	戒告	訓示	計

とりにも問題はあります。
 反マル生に勝利してから組合側は緩み、活
 動がいわば年中行事化してしまつたのに対し、
 一敗地にまみれた管理者側は執念深く対策を
 立て、行革に乗って攻撃を仕掛けてきた。そ
 のやり方は組合員一人ひとりを「本人評価」
 で分断しその弱さをついていくものです。こ
 れに対抗する力が従来の国鉄労働運動がつく
 ってこれなかった、ということになるのでは
 ないでしょうか。
 たしかに管理者の方にも矛盾はある。例え
 ば東京三管理局の統合化といった機構の縮小
 化案が出ているように、企業内での昇進はい
 ままで以上に難しくなっています。管理局が
 縮小して現場に下りてくれば、現場あがりの
 管理者昇進がきわめて閉ざされてくるのは当
 然です。こうした頭打ちにたいして「運転主
 任」の大幅登用など一般職の中の格差づけ
 でエサを与えようとする動きもありますが、
 それにしても限界があります。
 だから、いま平均的な組合員は「組合はや
 めない。しかし当局の出方が強いときはそれ
 に従う」といった、どっちつかずの姿勢にあ
 る、といえるでしょうか。

外に向ってもハッキリ語りかける。
 ここであいまいにすれば、合理化は
 すべてを奪うことになる。
 どうしたらよいかと思えますか。
 最初にかがった要員の合理化に
 ついても、ふつうの利用者はマス
 コミの操作もあって、赤字だから
 とか、タルミだからといってすま
 せてしまふと思えますね。ところ
 が具体的にどう影響してくるのか
 まったく知らない。
 ことは安全性にかかわる重大な問題ですか
 ら、密室の中で済ませられるものではない。
 これまでわれわれの運動が職場の中だけに閉
 じこもりがちだった点は反省しています。も

い出されてはいない。
 昨年二月の国鉄ダイヤ改正によ
 る貨物輸送が大幅に削減された
 (59・2合理化)。
 これにともない、従来の鉄道に
 よる郵便の輸送システムが改めら
 れ、鉄道郵便局がほとんど廃止さ
 れるといった状況になった。
 職場の労働条件は以前にも増し
 て劣悪になり、権利・慣行がハク
 奪され、組織不信は増大した。現
 場労働者の疲労感も倍増し、休憩
 時間やゴロ寝といった事が常
 態化し、集会・動員の参加率も落
 ちてきている。
 このような攻撃は郵便部門で働
 く労働者のみならず、官室関係で
 働く労働者にも押しよせてきてい
 る。オンラインの完成によって内
 勤労働者は減員・配転の危機にさ
 らされ、外勤労働者にいたっては
 「営業の時代」「民間に負けるな」
 のかけ声に追いまくられ、成績の
 悪い労働者には、強制配転(事実
 上の首切りに等しい)が行なわれ
 ている。
 今年に入って、60・3「全国定
 員調整」が最重要課題である。民
 間との競争関係に打ち勝つため、
 「翌日配達(民間宅配業者、クロ
 ネコヤマト、ペリカン等にシエ
 をとられてる)が叫ばれ、夜間
 労働の強化が「深夜勤導入」とい
 う形でなされようとしている。
 深夜勤の導入は職場の抵抗が強
 く、昨年末の中央交渉では先送り

今、郵政の職場は

志村一郎

た矛盾が露呈された。
 59・2合理化のもう一つの目玉
 である「実験時短」が全国的に実
 施された。これによって配達は一
 日一度となり、配達区域は拡大さ
 れた。
 職場の労働条件は以前にも増し
 て劣悪になり、権利・慣行がハク
 奪され、組織不信は増大した。現
 場労働者の疲労感も倍増し、休憩
 時間やゴロ寝といった事が常
 態化し、集会・動員の参加率も落
 ちてきている。
 このような攻撃は郵便部門で働
 く労働者のみならず、官室関係で
 働く労働者にも押しよせてきてい
 る。オンラインの完成によって内
 勤労働者は減員・配転の危機にさ
 らされ、外勤労働者にいたっては
 「営業の時代」「民間に負けるな」
 のかけ声に追いまくられ、成績の
 悪い労働者には、強制配転(事実
 上の首切りに等しい)が行なわれ
 ている。
 今年に入って、60・3「全国定
 員調整」が最重要課題である。民
 間との競争関係に打ち勝つため、
 「翌日配達(民間宅配業者、クロ
 ネコヤマト、ペリカン等にシエ
 をとられてる)が叫ばれ、夜間
 労働の強化が「深夜勤導入」とい
 う形でなされようとしている。
 深夜勤の導入は職場の抵抗が強
 く、昨年末の中央交渉では先送り

総合定員配置局管内別減員人員

区別	東京	関東	信越	東海	北陸	近畿	中国	四国	九州	東北	北海道	沖縄	全国合計
内務	-	-	50	70	-	-	120	160	-	80	70	-	550
外務	-	-	116	194	80	-	483	307	-	272	146	-	1,598
合計	-	-	166	264	80	-	603	467	-	352	216	-	2,148

客観的に観ること のできない三作品

土田兼二

《映評》



しかし、それぞれの中には、それぞれに印象に残るセリフなり、シーンなりがあった。そして、その部分がやはりその映画全体のワクを創りあげていた。

「竜二」にはこんなシーンがあった。竜二が子供のためにヤクザを捨て、仕事につき、家族三人の平穏な生活を送る。そんな中で昔の仲間から助けを求められる。そんな生活を守るために、それに応えることができない。家に帰り、アパートのガラス戸をあけるが、そこからは何も見えない。

「ここからはなんにも見えねえなあ」このシーンが、この映画のすべてとも言える。

「麻雀放浪記」では前後の脈々から説明しなが、出目徳という年配の入った麻雀打ち（パイト）が、一代の大勝負に出かける場面、窪地に建てられたバラックから斜面をのぼりながら、ゴミを捨てに出た女房をふりかえり、坊や哲という主人公

に語りかける。

「何が好きでオレと一緒に居るのか……帰ったらケツでもさわってやるか」

そして出目徳は勝負の最中、中連宝燈という大物手をものしながら死んでしまふ。「死んだ奴は負けなんだ。負けた奴は身ぐるみはがれるのが当然なんだ。」

裸にされた出目徳は他の三人に運ばれて、バラックのある窪地へころがされる。それを見つめる三人。一代の生き様であった。

「チン・ピラ」組織に金を上納しながらも、組織から盃を受けないまま競馬の「ノミ屋」をやりながら奔放に生きるチン・ピラ二人。しかし、ある日このノミ屋を手伝う弟分が組織の大幹部をからかってしまふ。呼びつけられた二人は、徹底的に痛めつけられ、指をつめられそうになるが、日頃の上納をしている幹部がとりなす。「このくらいにしてやるか。シロウトだからな。雨の中に投げ出される二人。倒れて雨にうたれ、血を吐きながら柴田恭兵がうめく。

「シロウトか。チキショー。チンピラのプロットではないのかよー」これも、この映画のすべてである。

このように映画のすべてを感じさせるシーンを作りあげ、それを頂点に、映画全体のすそ野としてひろがる。そのように創られたこの三作品は良い出来だと言える。もちろん、「竜二」、「チンピラ」の二部（同監督作品）と「麻雀放浪記」では創られかたはまったく違う。だが、「竜二」にしても、「麻雀放浪記」にしても、一カット、一シーンがきわめて密度高く、ていねいに創られていることに驚ろかされる。

映画というのは、どうしても二度見ないとその評価は下し難い。一度目は、その映画に投入し、思い入れし、感動する。二度目は、わりと冷静に、じつくりと味わう。

「竜二」は一度目に見た時に、見るものをつかんでほろろ魅力を持つている。それに比べると「麻雀放浪記」は、あまり思い入れることのできない淡白さを持つている。だが、二度目には「竜二」の印象は変わらないのだが、「麻雀放浪記」については、その一カット、一シーンがにじみ入ってくるような味わいがあった。

だが、こんな感想を書きながら、これらの映画を見る人々は、何を感じているのかということがふと疑問として起ってきた。わたし自身は、まともな人生を送っていないし、その分思い入れも強く、ある意味で、自分の延長線上にこれらの映画を見つめることができるのだが。

家を守り、生活を守り続けねばならない観客にとって「竜二」はあまりにもくだらなく、「麻雀放浪記」はなんとロマンティックな甘いものとして映らざるえないであろう。いろいろな分析を加えてみれば、日常からの脱出衝動だとか、ノスタルジアだとかに突き動かされるのだろうか、そうしたものとして満足するには、あまりふさわしくないもののようにおもえた。

本日は、作品論、監督論などとしてとりあげなければならぬものを、感想としてしか書けなかった。それほどこれらの作品を愛しているということになるのだ。

哲学問答 II 第三回 現代思想の系譜 その1 人生「拾い読み」の精神で

Q さういふお話をしたいとお願いがあつたのだが。

A 読者からの要請があつてね。前回の「つなばあ」注を「まか」つてつなばあつたばかりやういふ感じがするが。

A さういわれてもね……。前回や前回はいわば序論的なもので。そこで「まか」注をつけて「本論」してやるべきかなとなつたやういふ。(笑)

Q それに出ている人々の用語の予備知識がなくてもわかるやうに、いちおう配慮して書いてもらえないか。

A わかりないうつらういふ話でも書いてもいいんだ。わかるやうにだけつなばあを「つなばあ」で書いてもいい。さういふつなばあを「つなばあ」で書いてもいい。

Q 前々回の話で出た「つなばあ」の精神

神のつなばあ。それ、さういふ部分の意味もわかっているものですか。

A さう、その意味は知識の多いものにしてあげたい。考える「つなばあ」は知識の欠如を知識で置きなすというか、他人の考えを自分の考えであるかのように錯覚するということ、さういふことだ。(笑)

Q 最近学生にさういふのが多いね。とにかくいろいろ知ってる。「フリスティア」だつた、デラダがついたとか。だが肝心の自分の考えがまるでない。

A つなばあの話はいいやね、せつない。(笑)

Q それにあまり力を入れないで。(笑)

A そもそも、いまの大学の先生がさうだから。学説史の要約みたいな論文が氾濫している。しかもさういふのがいろいろとある。さういふの、東大の中西洋が膨大な論文を発表したことがある。なにしろ、大

河内一男と宇野弘蔵の両巨頭からはじまつて、その弟子、孫弟子、ひ孫弟子と、かく西派の社会労働政策にかなする文献の要訳がええんと出てくるんだ。

Q ちよつと待って、その論文の名前も必要知識には入らないでしようね。(笑)

A さう、読むだけ無駄。読書案内にして分量が多すぎる。(笑)

Q つかいぬ。『経済学雑誌』(1950)枚のりの大作がある。それも何年かにわたつて。ところが中西本人の主張がさうはりつきりない。

Q いかげんツンツンしたやうで、「生産点における資本の支配との関連で一九世紀イギリスの労働立法をおさへ、そこから国家論を説く」という構構がぶちあげられる。

Q へ、つなばあですか。

A それでおしまい。(笑)

Q 前置きだけの超大作か。スープはつかひ出ている「フルース」だね。まるで。(笑)

A 「生産過程の矛盾から国家論を展開する」といふ発想も陳腐だ。

Q 「あんなにさういふ話をする。ス、ハイ、つなばあで評判になった論文だ。

Q 引用というのは、自分の主張に客観性のおよそを与えるツツツツとしてつなばあを使われますか。

A まわりもさういふ「ロケット」をかいたみたい。さういふ話で客観的に要約している。結論にちなむさういふ手が加えら

Q 前置きと結論とは、論理的には無関係だといつてはいいですか。

A 「心理的な効果」をバツとすればね。(笑) 結論の論証にいたる論理展開がいつさいない、めづらしい論文なんだ。引用と寸評でそれが代用されてる。

Q 数頁、ひよつとしたら千枚を越えるかな。そのうちで本論といえるのはわずか数十行、それなのにさういふ文章がほつたがいて迷感だ。(笑)

Q 中西洋もさうなんだ。

A 個人的にうらみがあるわけじゃないんだ。でもホントにこんな論文がはびきかしてると、最近の学術誌でね。東大の先生の仰々しい文章も、実体はこんなもんだ。さういふ文章がわかれば、知識にたいするみんなの考えも変わるんじゃないか。

ふわっと交流会 について

ユージン・キャツパラ



去年の夏から「ふわっと交流会」が始まった。集まってくるのは、東京の学生、若い労働者で、神奈川県・京都の人たちも顔を出している。三月の合宿から大阪の若い労働者も加わってくれることになった。

皆、それぞれの地域や学園で何らかの活動をしてたり、何かやろうとしている者たちである。

「ふわっと」の名称には、たいして深い意味はないが、集まることや交流の位置づけ、主旨などにあまりこだわらず、集まり、話し酒を飲み、それがハンパじゃなく楽しいものにするのを一番に孝えよとの雰囲気から出てきたものだ。それは、今までの生き方や活動が無意識のうちに既成の運動形態や発想にとらわれ、次にはこうしなければならぬんだというように自分自身で枠組を作ってしまう、もっと大きく広がったかもしれない芽を摘んでいただろう、という気持ちが大きかったからだ。そして、それはなによりも自分自身がさほど楽しくなく、義務感やスケジュールで動いていること自体を変える必要があると思っただ。

からだ。まずは、自分たちが楽しもうとする関係のなから自らの硬いカラを引っぱがし、閉じこもりがちな思考や行動をどんどん外に出していきける仲間作りが「ふわっと交流会」だと考えている。

まだ半年ぐらいいいかたっていないが、それなりにうまくいっているよう思う。それは、なにせ「ふわっと」で飲む時が一番楽しいからだ。

これまでの活動は、去年夏の三里塚での合宿、秋のワンバック収穫祭での芝居、それと交流誌「ふわっと」を二回発行した。合宿では十数人の仲間が集まり、『俗物図鑑』と『緑の光』を題材にしたパネルディスカッションをおこなった。しかし、本を読んでこない人が半数もいたりして、題材を中心にした議論にはならなかったが、それがかえって思っただとを自由にしゃべれる場にしていったようだ。今思えば「ふわっと」らしい出発だった。ここでは言葉としてまとまった結論などなかったが、皆なにか今までの運動にはなかったダイナミックなものを作りたという気持ちは共通していたと思っただ。

つまらない、「俺たちもいるんだ」ということを表現したい」という話から出てきたものだ。もちろん、芝居の経験など皆ありはしない。しかも練習はたった二回だけ、それも出演者が全員そろったのは、本番前の現地での練習のみという、ほとんど度胸だけの芝居だったが、「舞台に立って目立つんだ」という、へんな乗り物が、「ふわっと」のなかで作られ、盛り上がりがあったのだ。

だから、各人は俺が一番目立つんだとばかりに、一晩がかりでかあちゃんを説得し、ブラジャーを借り、眉毛を剃ってオカマになりきろうとしたり、ももひきにポロ布マントというわけのわからない姿をしたり、そろそろ寒くなるのでやめようと思っただモヒカンそのままだで登場したり（我がメンバーにはモヒカン頭がいるのです）と、壮絶なものだった。

三里塚現地では、このような「中谷津グループ」の雰囲気も乗り越えてほしくない、との意見が一部あるように聞かされた人たちは、ヤジを飛ばしながらそれなりに楽しんでたように思う。一番反応したのは子供たちで、「なんだ僕たちも好きなように舞台上がっていいの」と錯覚したのか、我々が真剣に上演して

るにもかかわらず、かかってに舞台上がって飛びまわってしまった。また、交流誌にしても盛り上がった者が皆の確認など一切とらさず、かかってに作ったりと、見方によってはかかってに遊んでいるのではと思えるかもしれないが、このような積極的な行動ができてしまう関係はすばらしいし、なにか考えつかないものが出てくる可能性を含んでいる。

最近では、仲間の一人が、音楽を通して新しい広がりを作りたいと一生懸命だったり、また違う仲間は、「最近三里塚の映画が作られないし」と、ワンバックを題材にしたドキュメンタリーフィルムを作りたいんだと熱意を燃やしたり、なんだか「ふわっと」は、新しい若者の文化や運動を創り出す渦の中心のように思えてくるのはやはり大袈裟か。

なにはともあれ、色んなことが飛びだしてくるのは楽しくてしょうがない。三月の二、三日に名古屋で合宿することが決まった。青年の主張「よろしく自分が今やりたいことを各自が書いてきて、それを肴に酒を飲もうというものだ。もしよかったら読者の皆さんも参加して下さい。

普通の 人達へ

第1回

「ねえ、聞いて聞いて聞いて」

有田 蘭

「ねえ、聞いて聞いて」を逃げたい相手の都合を無視しても喜々としてしゃべりたい話が毎日のように溜り続けている。「障害者」とつき合う職場―施設に勤めて二年である。

編集部よりの依頼は「障害者」問題という、きつかけの無かった者には非常に実感し難い内容を、本誌にも取り上げたいというところらしい。とはいっても「障害者」の置かれてる現状をその問題点、といったタイトルの話は、書く気持はあっても展開できるだけの持ち合わせがないので、日々の生活の中で見たこと、聞いたこと、感じたことをボコボコ書こうと思う。

「障害者」で、社会福祉施設に關しての分類は十も二十もあるけれど、私の職場は心身障害者生活実習施設といわれて、心身障害者、十五歳以上が保護者の下から通園バスで通ってきて、わかりやすくいうと大人の保育園のような毎日の生活である。下、差別の真只中にあるオカシな連中との出会いによって、それまでに自分が持っていた価値感がちがってしまっただ観がある。学生時代から「障害者」の介助を含めて、「障害者」問題に取り組んで、その道にこそこそ精通していると思込んでいて、それがよくある「活動家」症候群なのかもしれないが、五人や十人の人と少々つき合っ

「新左翼業界」の人たちでも「し世つで動くのは大変でしょう、ボクには自信がないなあ」と同情して下さる方がいらっしやるけど、ところがどっこい就職してこのかた、この職場にいるのがしんどくてイヤだと感じたことはなくて、それどころか、嬉しい、楽しいと一杯で、「障害者」やその家族の現状や、将来の展望に何の役にもなっていないのに自分だけ解放された気持ちになってニコニコしていてごめんなきやという感じである。

「障害者」差別はイカンと考えつつも、それがどんなに多面的であるかを実感し難い人たちに、私の出会った奴等が生きる行動のこと、その家族たちの死ぬか生きるかまでいっちゃうような悩み、私が一緒に働いている職員たちのこと、施設がかかえている問題なんかを、「センセイ」と呼ばれながら仕事をしている者の立場から話してゆこうと思う。

しんどいことが山ほどあって、それを何とか解決しようと日夜努力しつつ、できることなら明るく、楽しく、穏やかで、心も体もしなやかに解放されたながら聞きたいと感じている同志諸君に、私のテレパシーがいくらかでも通じますように。



親子三代東京人から一言

かやのけん

東京のアパートに独りでしばらく黙っていると、破滅的気分にとりつかれて、マンガ的破壊衝動や逃避願望が頭をもたげてる。山手線の車中で「いま地震が起きれば楽しいだろうな。こんな街はすべてぶっこわしちゃえばいい。右も左も大差ない。人類全体の悪業を清算して未来を切り拓くには荒療治しかないぜ。」などと平気で考えるに至る。東京なんかに未来はないのか？

でもかなり無理をして久々に新年号を読むと、「ブラックホール」氏は、私には信じ難いほど盛り上っているし、三人の論者は、それぞれ役割を、これまた信じ難いほど原則的かつ誠実に果している。同情と軽蔑と連帯の拍手だ。頭が一度はパニック状態になった後に、「うーんと唸りながら」やっぱりここで緊張らなあかんのかな」と思われ、私の「東京論」を一言……口にしたくなかった」のだから、「この企画はなけば以上成功した」ということか。ニンマリする編集者の顔がまぶたに浮かぶ。だが待たれよ。結論を急ぐなかれ。日本資本主義発展の二の舞いはゴメンだ。

「地方」都市東京を料理する際の味付けとして、形成史や現状の一般論が生きてくる前提は何か。結論は言うに難くない。「自分の身近なところから変えてゆく運動があり、中央や機関誌が常にそれらとの流動的で緊張感あふれる結び付きを持って全体が動いていること」であろう。傍点に注目あれ。「身近なところ」から、いきなり「地域」や「社会」などのインテリ好みの抽象語を連想することはない。家族、親友、職場の同僚などのいつも顔を合せている人とのつき合い方、自分の生活スタイルに東京的特殊性がどのように反映しているのか。他の都市や農村漁村、他国の事例と比較するとどうなのかを問い直すところから考えてみよう。答は羅列的に出てくる。

職住分離、溜り場不足、隣人への無関心、高すぎる家の敷居、コンクリートと車のジャングルなど。人間の内的自然と大自然を短期間に破壊した「廃墟の街」に我々はかなりの無理をして住まざるをえない訳だ。「東京人」はどうやって自己満足しているのだろうか。第三章の分析が面白い。「なんと九二・九%『中流意識』を持っているという。その根拠に、『見栄』で『そう思い込まされ、また自分に言いさかせている』(十八頁)こと、三十年

が問われる。論者はよく控え目に全般的前提で止めているので、私の理解を付け加えてみる。「東京砂漠」の指摘「草の根保守のネットワーク」、「主婦パワー」の動きや議会対策の重要性の指摘には異論ない。しかし最後の文化の問題については、もっと詳しく聞きたい文化って何なんだ。

東京の地域に限らず、ある場所の運動が多くの人を引き付けて力を発揮するには、利害関係を前提とする「解放」空間を必要とする。それは、人間の内的自然を素材に積みうる溜り場が用意されねばならないということでもある。近年に多大な成果を生んだ「地方」の運動は、合同労組、障害者とのつきあい、保育所、私塾、定例の地域学習会・シンポ、生協、三里塚などで、そのほとんどが溜り場を共有する。大枚を集めて新設するばかりでなく、私宅や老朽施設を開放したものも多い。これをもっと増やして豊かにして、草の根の保守を脇腹と背後から刺殺するには、いかなる質の対抗文化が求められているのか。この点の実態調査と分析が次の課題であろう。

さらに、敵を本当に倒すには、その懐に入った振りをして、そこで我々の身心を思うがままに解放させてみるのも良いだろう。例えば、ふつうの人が敬遠しがちのPTA会、町内会、団地自治会などに入り込んで好き勝手してみるのも面白いではないか。つぎは逆方向からの報告が欲しい。東京の地域の現場からの生々しい声と、「前衛」の理論の記事とが切り結ぶ地平に、「新生」機関誌の成果はふくろうのごとく現れると希う。念のために言うと、私、親子三代東京人、三十九才です。

表紙のことば

ここに通常の装置からはずされ、機能を停止された一枚のレコードがある。存在理由もたず、ただ物質それ自身としてのみ存在するような、無音の自閉状態がある。

だがしかし、その物質が発語する。本来の機能が無化することによって、隠された機能が不意に姿を現わす。

「かれは芸術と現実のあいだに、どんな境界もありえないことを徹底的に自覚し、その隠雑さ、俗悪さ、無意味さのただなかで、二つの概念を刺しつらぬくもうひとつの芸術を求めているともいえる。」(「ヨーゼフ・ボイス——不気味な、関係の形而上学」針生一郎)

「超芸術」とは、無用のメタファー(隠喩)ではないだろうか。

編集 『前衛』編集委員会

発行人 高橋一雄

発行所 現代企画 ☎03-293-8564

東京都千代田区神田神保町1-64

神保町ビル203号 振替東京5-44589

購読料 2800円 (年間〒共)

4400円 (密封・年間)

定 価 200円